

③ ツル類を指標種とした重要地域（河川・湿原地域、里地里山・田園地域）

河川・湿原地域、里地里山・田園地域の指標種として、大型の水鳥であるツル類(北海道ではタンチョウ、西日本ではナベヅル・マナヅル)に注目した。

タンチョウ(北海道)

正富宏之ほか(2007)によれば、タンチョウの近年の分布状況は図 14 の通りである(営巣数約 300 地点、平均最短巣間距離約 2 km、縄張り 1 ~ 7 km²、低木・高木が散在する湿地環境での営巣が多い。亜成鳥を主とする非繁殖鳥が、湿地ではなく丘陵や伐採地あるいは農家付近などを利用していること、樹林内で索餌休息することも多いとされている)。

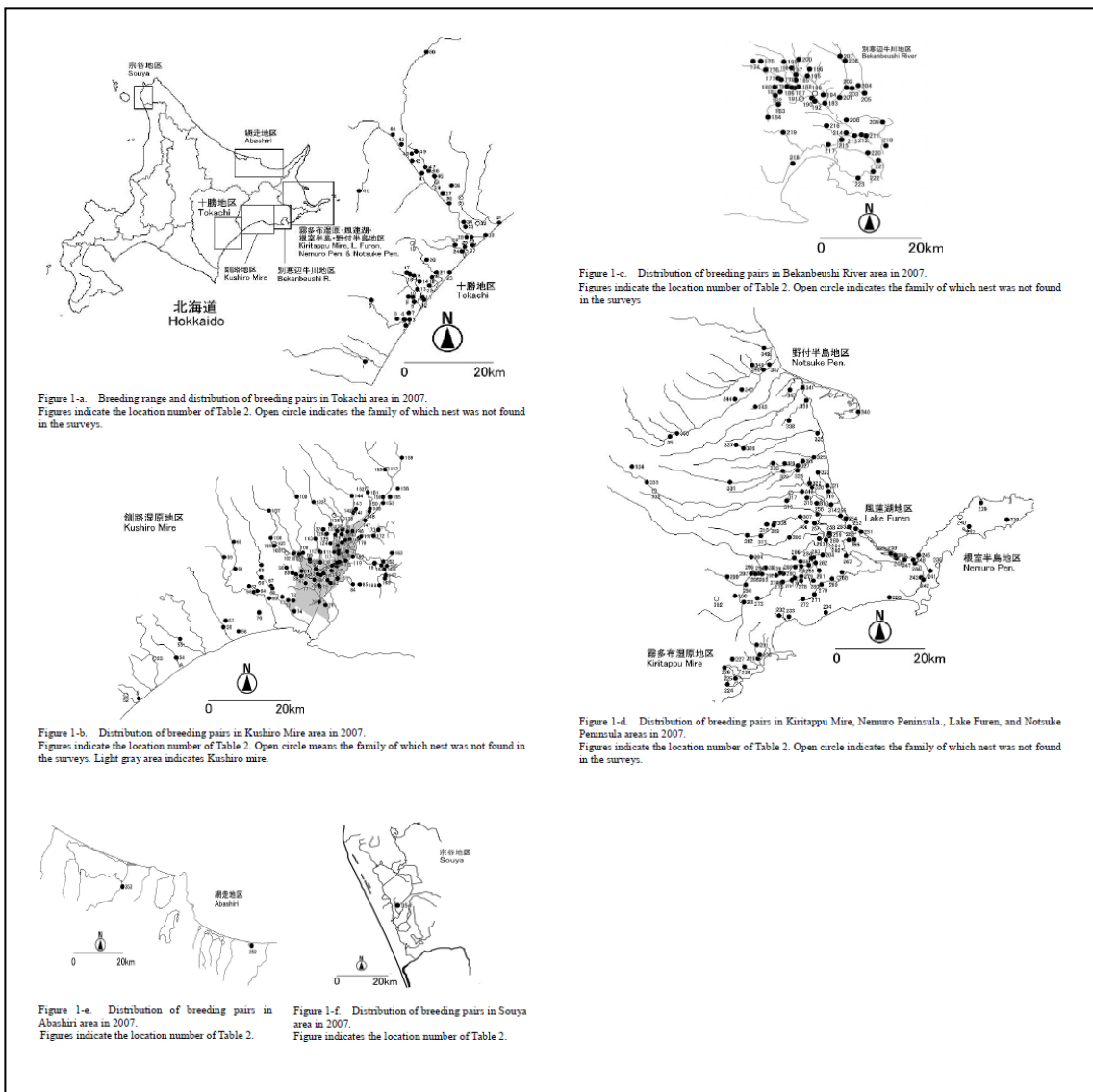


図 14 タンチョウの繁殖地(2007年)

出典：正富宏之、百瀬邦和、古賀公也、正富欣之、松本文雄(2007):北海道における 2007 年のタンチョウ繁殖状況.,専修大学北海道短期大学「地域総合科学研究センター報告」第 2 号.

タンチョウは、湿地に生息する種であるが、日本全国の湿地面積の変化によれば、明治・大正時代の湿地面積は約 2,100km²であったが、現在に至る間に、宅地化や農耕地利用等の人為的要因、土砂流入などの自然の要因により、明治・大正時代に存在した湿地面積の約 61.1%が失われた（国土地理院、2002 年）。北海道には日本を代表する広大な湿地が多く集まっているが、釧路湿原をはじめ北海道内の多くの湿原等の湿地の面積は、明治・大正時代と比較して激減している。こうした生息地の減少等により、現在、タンチョウは、主に北海道東部に分布が狭められている。

しかし、前世紀半ばより、給餌効果等により個体数が増えつつあり、それにともない繁殖つがい数も次第に増加している。分布域も拡大する方向で対応していると考えられている。すなわち道内では、網走湖、濤沸湖、佐呂間別川、さらに 2004 年から道北でも繁殖が確認されている。十勝地方方向へも分布域の拡大傾向が確認されている。北方四島については、断片的情報があるのみであるが、1982 年以降、国後島及び歯舞群島でも少数の繁殖が確認されている。

越冬場所については、ほとんどのタンチョウが、現在も、阿寒と鶴居の給餌場とその周辺の河川・湿地を主たる越冬地としている。

以上の検討をもとに、タンチョウを指標種とした重要地域(河川・湿原、里地里山・田園地域)として、図 14 をもとに図 20 の北海道等の部分を作成した。図 20 の北海道等の部分の作成に当たっては、営巣数が約 300 地点（平均最短巣間距離約 2km）あり、それが主として北海道東部に集中していることから、全国図へは、以下の方法でその代表点を示すこととした。すなわち、十勝川河口より南の当縁川河口・生花苗川河口あたり一帯、十勝川河口一帯及びその上流、釧路湿原一帯(釧路川を中心にその下流域一帯及びその上流域一帯)、別寒辺牛湿原一帯、霧多布湿原一帯、根室半島中央部、風蓮湖一帯及び流入する風蓮湖川一帯、標津川下流一帯、濤沸湖及びサロマ湖一帯を、タンチョウの主な重要地域としてその代表点をポイントで示した。そして、越冬地である阿寒・鶴居と各繁殖地との間を移動している現況をラインで示した。

なお、道東で越冬しているタンチョウが、北方四島の国後島において繁殖していることが確認されていることから、主な越冬地である道東から国後島との関係も併せて図示した。

ナベヅル・マナヅル(西日本)

ナベヅル、マナヅルの近年の渡来状況は図 15、16 の通りである。ナベヅル、マナヅルの現在の代表的な越冬地としては、鹿児島県の出水及び山口県の八代が従来知られている。両地域のナベヅル、マナヅル等の渡来状況は図 17、18 の通りである。

ナベヅル、マナヅルは、かつては日本各地に冬鳥として渡来していたが、明治以降は鹿児島県、山口県などに限られるようになった。近年は高知県等でも越冬が確認されている。渡りの途中には少数が北海道から沖縄まで各地に短期間出現することがあり、その頻度は増加傾向にある。

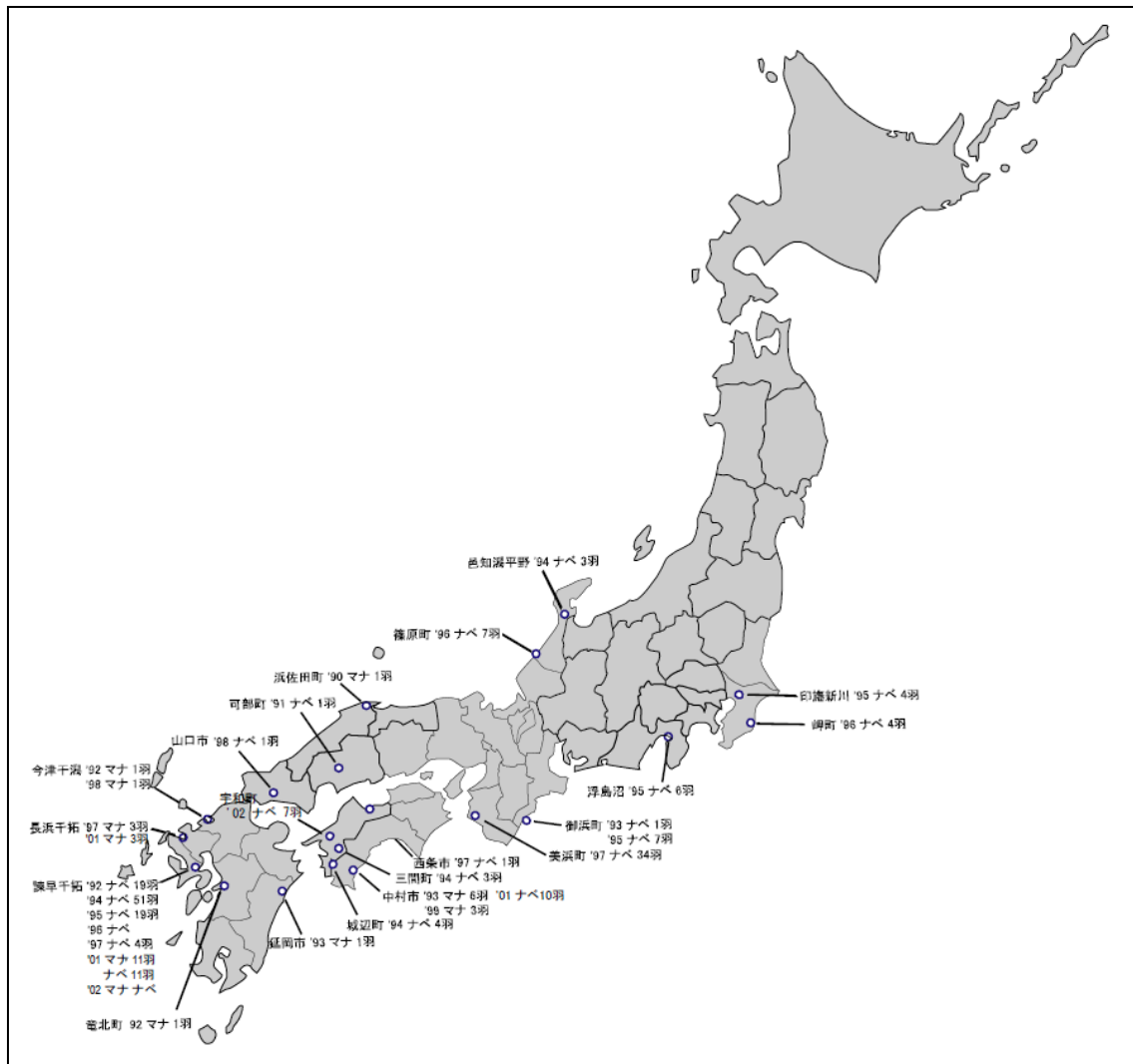


図 15 アンケート調査に基づく 1990 年～2002 年のナベヅルとマナヅルの滞在情報
(2 か月以上滞在した場所を越冬記録として整理)

出典：(財)日本野鳥の会「ナベヅル・マナヅル分散プロジェクト」サイト
(<https://www.wbsj.org/nature/kisyou/crane/>)

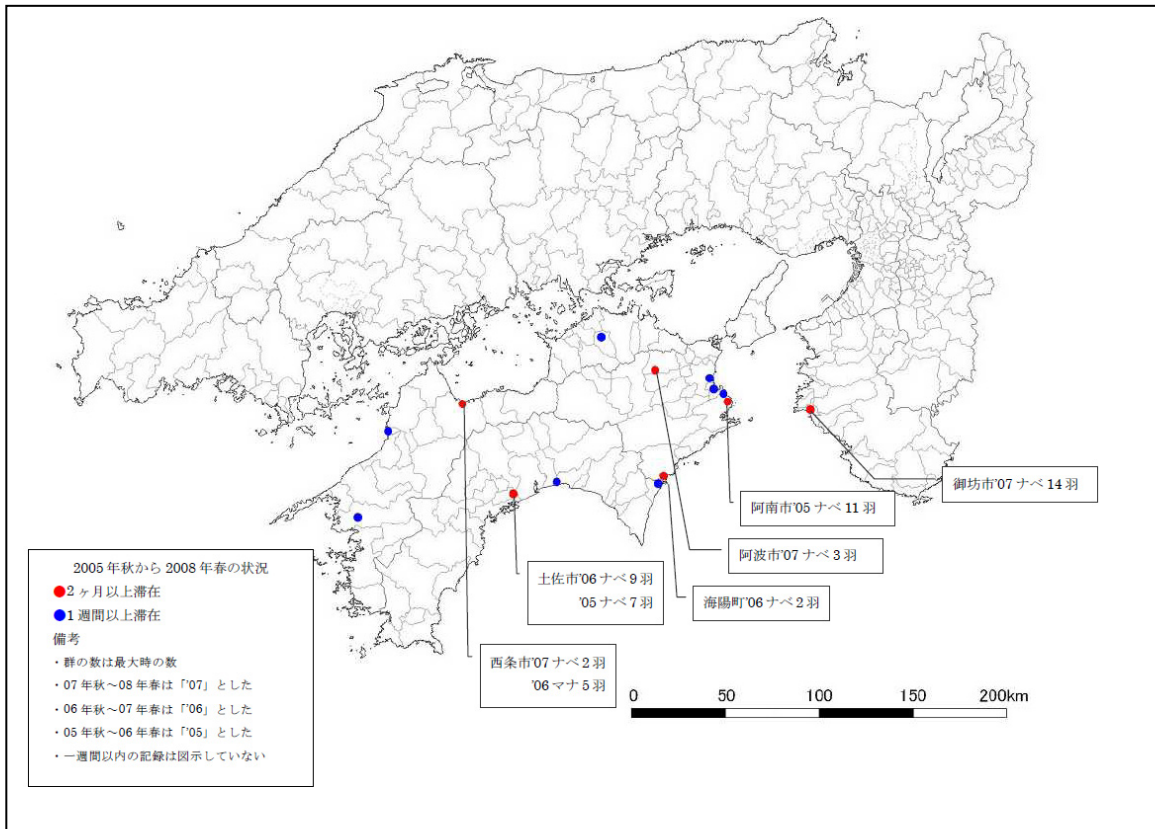


図 16 2005 年秋から 2008 年春のツル類の渡来状況

出典：四国ツル・コウノトリ保護ネットワーク(事務局：(社)生態系トラスト協会)提供資料

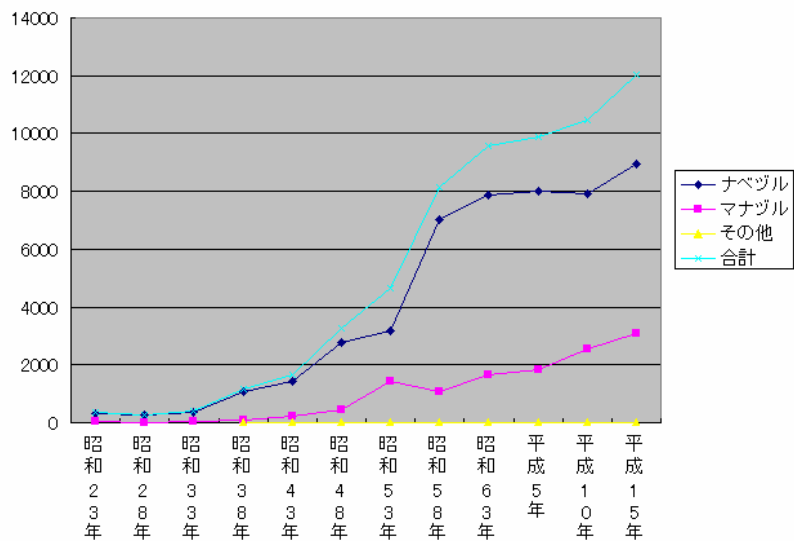


図 17 鹿児島県出水におけるナベヅル、マナヅル等の羽数

毎年1万羽以上のツルが渡来している。

出典：鹿児島県出水市役所ウェブサイト



図 18 山口県周防市八代のツル最大渡来数の変化（5年ごと）

渡来数は、昭和 15 年の 355 羽をピークに、それ以降、安定期と減少期を繰り返しながら減り続け、現在は 20 羽程度の渡来数まで落ち込み、平成 19 年度は 7 羽であったが、出水に次ぐツルの定期的越冬地として知られる。

出典：山口県庁ウェブサイト

鹿児島県出水では世界の総個体数の 9 割を占めるナベヅルが越冬する。マナヅルは、その約 4 割が出水に集中して越冬していると推定されている。出水では、渡来個体数の増加によるねぐらや採餌場所での過密状態が生じている。これは自然の餌不足を招いたり、伝染病の流行の危険性を高めている。一旦伝染病が流行すると、その影響の大きさが危惧される。

環境省・農林水産省・文化庁 3 省庁合同で、平成 13～14 年度に「出水・高尾野地域におけるツル類の西日本地域への分散を図るための農地整備等による越冬地整備計画調査」が実施され、越冬可能地域及び地元調整を経つつ分散候補地の検討が行われている(図 19)。

■ ツル類分散候補地

- 1.山口県熊毛市、現・周南市(100羽程度)
- 2.高知県中村市(現時点では不明)
- 3.佐賀県伊万里市(数百羽)
- 4.長崎県有川町(10数羽)

※括弧内は受け入れることが可能な羽数の目安

■ ツル類越冬可能地

- ・ ツル類の越冬実績のある場所

ナベヅル

長崎県諫早市・森山町 三重県御浜町 愛媛県三間町 徳島県阿南市

マナヅル

長崎県諫早市・森山町 熊本県八代郡 熊本県河浦町 福岡県今津干潟

- ・ ツル類の越冬実績はないが、中継地として利用されており可能性のある場所
長崎県対馬 長崎県壱岐
- ・ 過去に越冬実績があり、現在でも越冬環境条件があるもの
熊本県阿蘇山麓
- ・ 地理、土地条件から可能性が考えられるもの
佐賀平野
- ・ 地元で NGO 等のツル誘致の活動が行なわれている場所
大分県玖珠盆地 香川県観音寺市

図 19 ツル類分散候補地及び越冬可能地

出典：環境省・農林水産省・文化庁「出水・高尾野地域におけるツル類の西日本地域への分散を図るための農地整備等による越冬地整備計画調査 報告書(集成版)」(2005年3月)

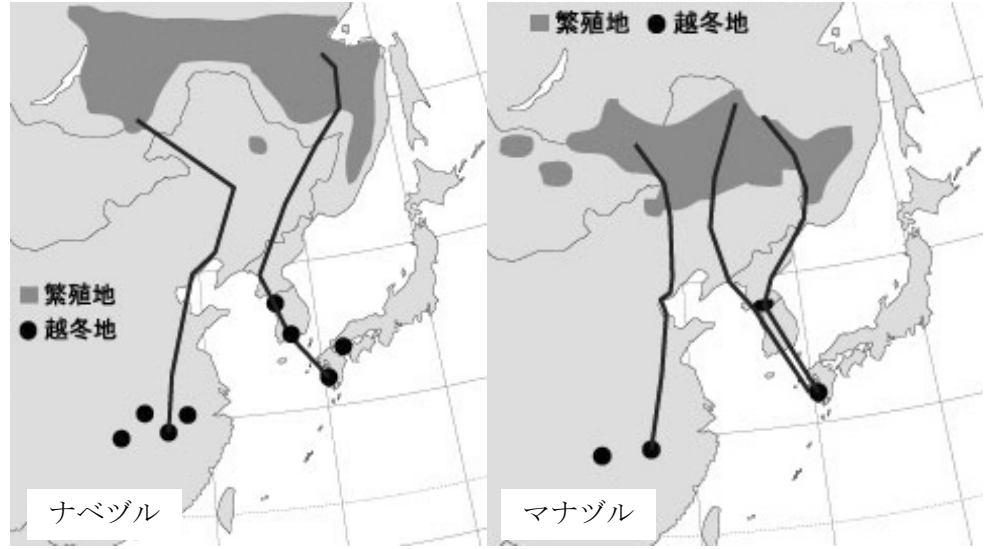
越冬地として安定して利用されている地域は、現時点では、鹿児島県出水に限られている。このことから、わが国におけるナベヅル、マナヅルを指標種とした重要地域として、図 20 に鹿児島県出水を図示した。渡りルートについては、大陸から朝鮮半島を経て出水に向かうルートが知られており、これを図示した。

検討に当たっては、(社)生態系トラスト協会(「四国ツル・コウノトリ保護ネットワーク」事務局)会長・中村滝男氏(日本野鳥の会顧問)の協力を得た。

主に関係する生態系等のタイプ	河川・湿原、田園地域
ツル類の保護にとって重要な地域	タンチョウ ◆ ナベヅル・マナヅル ◆
現在の季節移動	→
渡りルート（概念図）	→

近年、国後島、歯舞群島でも繁殖が確認されている

夏場は東シベリア南部、ロシア極東部などで繁殖



ナベヅル、マナヅルの繁殖地等
出典：財団法人日本野鳥の会資料

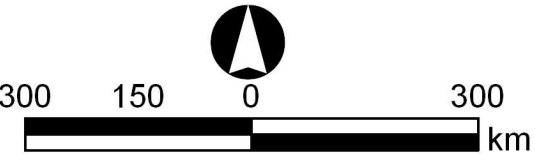


図 20 ツル類を指標種とした重要地域（河川・湿原地域、里地里山・田園地域）

出典：正富宏之・百瀬邦和・古賀公也・正富欣之・松本文雄「北海道における 2007 年のタンチョウ繁殖状況」（専修大学北海道短期大学、2007 年）、四国ツル・コウノトリ保護ネットワーク（事務局：（社）生態系トラスト協会）資料、（財）日本野鳥の会資料等をもとに作成